

銃口を向けられるような状況に陥るなんて、この平和なはずの国に生きるどれだけの人たちが想像できるんだろう。少なくともぼくには出来なかった。今この瞬間まで。そして、まさか本当に引つかかるとも思わなかった。

「おい、どうするよ」

「とりあえず運転免許証の写真撮っとけ」

「そうだな。おい、出せ」

震えを抑えてるつもりでいたけど、免許証が入った財布を渡す手は震えていた。まさか撃たれないだろうと思っただけでもその時までは何事もわからないものだ。

「……不運だったなあ、でも仕方ない。こんな時間こんな場所を出歩いてるのが悪い」

時間は午前三時十二分。場所は埠頭。不覚にも、確かに、と思っってしまった。そもそも違法薬物を売買するという話なのに。

財布の中身を物色しつつ免許証を取り出したプリン頭の青年はぼくの個人情報を読み上げた。

「矢賀正明、E13年12月20日生まれ、住所は……変わってるのか」

裏面を見て、青年はぼくをもう一度見た後、仲間たちの方に呼びかけた。

「おい！ こいついい場所に住んでやがるぜ」

小さな漁船上でなにやら作業をしていたふたりの男がこちらにやって来る。

「なんだよ」

「だからコイツいい場所に住んでんだよ」

「あ〜？ ……ちげえよ馬鹿。これは以前の住所だ。今は……むしろ駅から遠い」

なんで知ってるのだろう。

「なんでわかんだよ」プリン頭が不機嫌に訊いた。

「母親の方のばあさんが住んでた場所と同じ住所だ。もう死んでるけど」

「へえ……お前の話、初めて聞いたな」

プリン頭と物知りの他のもうひとり目が目を細めた。含みがありそうだった。

「野郎に話すことなんてないからな。で、だ。コイツどうすつか」

「あ？ 放っておいてもいいだろ」

「そう思ってたんだけどな……」

物知りがぼくをじっと見てきた。ぞっとして、肩が自然と縮こまる。

「……」さらに見てくる物知り。

「殺すか？ 無理だろ」まさかという顔のもうひとり。

「オレが撃ってもいいよ」あっけらかんと言うプリン頭。

「それはやめてください。殺さないで」

「そうだな、連れて行く」物知りのその言葉に他二人が驚きの表情になった。色々と言ひ合う

三人を前にぼくは膝をつき、額を地面につけた。まるで絶望したように。